

やうにおぼめかしいへるにこそ、

〔柳亭筆記二〕おろせ

上方にて駕籠かく者をおろせといふ、或人の曰、昔駕籠かく者が、おもくばおろせと云歌をうたひてかきたりしが、中昔より歌をばうたはず、たゞおほせくとかけ聲にしたるより、おろせといふなりとぞ、寛文年間に刊行せし、獨吟集に、前麓への道にて連レも一休み、安靜、附おもくばおろせおろせと、同、此句は駕籠といふ事なければ、たしかには聞えがたけれど、是よりさき明暦年間印本、野良虫の序に、略中それは四條川原のかぶき子の事にては侍らぬかといへば、大手を打て笑ひて、さればとよ、そのかぶき子といふ者、去年今年就中はびこりて、略中のやつばらのとろく、眼にたらされて、芝居終れば、東山にともなひ、あんだ乗物にのせられて、はいくおろせおろせといさみす、む云々とあるに、てらしあはせて考れば、そのことのやうに思はる、此事引書も見いせず、考もたらざれど、まづ心おぼえに書かせておきつるなり、

貞享五年辰色里案内島原條に、卸オキセとは此里の籠かき也、揚屋茶屋など、銀拂の請合するものなり、

〔好色二代男六〕小指は戀の焼附

夜船に乗遅れじとの、早駕籠かと思へば、伏見卸オキセが通るといふ、是は京都を忍び大盡、略中廓の外に、京屋の七左衛門、大和屋の七兵衛とて卸オキセ宿あり、是に夜明を待ちて、乗せて返る、三人懸り、銀一兩の定め、

〔江戸職人盡歌合下〕十三番 右

おもふ事ゑやはゆふべの四ツ手駕かくと、まらせん便だになし

〔守貞漫稿後集三〕京坂市民常ニカゴヲ用フルコト稀ナルヲ以テ、駕籠屋ト稱へ、是ノミヲ業トス

ル家ハ、唯諸遊里ニ在ルノミ、中ニモ島ノ内八幡筋ト字スル所ハ、一町ノ間駕籠屋ノミ住ス、

駕籠屋

四ツ手駕かき